

旧大宮寺宝篋印塔



〔指定年月日〕平成元年三月三十一日
〔種別〕有形文化財（建造物）
〔名称〕旧大宮寺宝篋印塔
〔点数〕一基
〔所有者等〕個人
〔所在地等〕堀ノ内一丁目

旧大宮寺宝篋印塔

この宝篋印塔は、大宮八幡宮の別当寺であった大宮寺にちなみ、俗に大宮寺宝篋印塔とよばれる。その由来や原位置は詳らかではないが、『新編武蔵風土記稿』和田村大宮寺の項で、この塔を「古碑一基大門ノ通り北側堤ノ上ニアリ（中略）長さ二尺八寸許ニシテ台石アリ 五輪ノ形ニ似タルモノナリ」と伝えている。

本塔の原形は、相輪、露盤・笠、塔身、基礎、台石の五部分より構成されていたが、現在、相輪は失われており、総高一五一cmである。

塔身は四面とも粋取りがあり、金剛界四仏（阿闍・宝生・阿弥陀・不空成就）の種子を配する。反花座を有し、台石の側面を左右二区に分け、格狭間を刻むなど典型的な中世関東式宝篋印塔の様式を示している。また、やや腰高な感じ、隅飾の形・反花の比較的強い反りなどから造立年代は鎌倉末ないし南北朝期と推定できる。

この宝篋印塔は、一部に欠損はあるものの優美な当初の姿をよく残し、区内の中世石造物中最も重要なものであり、かつ、復元推定一八〇〜一九〇cmの総高は、都内における中世宝篋印塔としても白眉のものである。

中世における本地区の歴史・文化を考察する上での貴重な資料である。

【文化財所在地】

